

HAT CROSS

神戸赤十字病院広報誌
2004 Vol.4

神戸からエールを！

新潟中越・被災地へERU救護班が緊急出動



子供達へのメンタルケア



避難所での巡回診療



10月26日午後1時 ERU第1班(12名)が病院を出発



一人ずつ声をかける班員



救護班ミーティング

ERU救護班 第一班 医療責任者
整形外科副部長 戸田 一潔



このたび、新潟中越地震が10月23日に起こった直後の10月26日より、神戸赤十字病院の救護班の第一班として陸路ERUの機材と共に11時間かけて、新潟県長岡市に行かせて頂きました。

阪神大震災より10年、救護班12名全員が10年前の恩返しをできればという思いを胸に、病院からの派遣決定から約半日で集合しました。

急な召集であり、日常診療をいって行かせていただくため、多くの方々にご迷惑をかけてしまうことは明らかでありました。その分、今回の派遣に際し、受け持ち患者様や外来予約の患者様や、私の派遣期間中バックアップしていただく同僚・スタッフの気持ちを代表して現地に赴かせていただくのだという意識が強くありました。(それにもかかわらず、帰院後も患者様やスタッフから多くのねぎらいのお言葉をいただき、ただただ感謝するばかりです。)

私は、阪神大震災の震災2日目に医者3年目28歳で旧神戸赤十字病院(県庁前)に派遣され、今回は二度目の震災救護でした。当時は、災害現場から次々と運び出される重傷者を前に無力な自分を感じていたのを昨日のこの様に思い出します。今回は医師班の最年長として少しはお役に立ちたいという思いがありました。

新潟では、避難所を中心とした診療が行い、疾患も患者様や被災者の層も違いますが、診療所を据えた長岡市や

六日市周辺の巡回診療では、地震から4日目を迎え風邪のほか、不眠、めまいといった避難生活のストレスからくる様々な愁訴が主な疾患でした。

どこに行っても、赤い十字のシンボルマークの入った服装は、皆様に安心感を与えていることにすぐに気づかせてもらいました。また、私達の関西弁から神戸から来たのだとわかると、さらに親しみをもっていた頂きました。被災者の方から「神戸もあの時は大変だったでしょう」と、避難場所の体育館の中という状況の中おっしゃっていたのだと、全国から私たち神戸赤十字病院に求められていることは大きく、出来ることはたとえ小さくとも、こうした状況においては大きな影響を与えうることを実感させられました。

今回の派遣は、想像以上にマスコミを含め反響が大きく、特に私達第一班が取り上げられ、そのことに大きな戸惑いを覚えています。

繰り返しになりますが、私達が安心して新潟の地に赴くことができたのは、神戸の地より応援をいただいた皆様方の後押しがあったことが一番の要因であります。

震災は起こらないことが一番ではありますが、またいつか不幸にも震災等が起こった折には、今度は現地に赴く以外にもできることが多くあるのだ、ということの皆様から学ばせていただきました。ありがとうございます。

最後になりましたが、新潟の方々にとって、まだまだつらい日々が続いていることに変わりなく、一日も早く平穏な生活が戻ることを心から祈っております。(一班に続き、二班・三班が当院より出動しました。)

診療科 クローズアップ

VOL.3

「最適かつ安全な治療を
提供します」

循環器科部長 高岡先生

循環器科

高岡循環器科部長



★診療内容
出勤の駅の階段でどうも胸がつまるような感じがする、お友達と一緒に歩いているとどうも胸苦しくて遅れてしまうなどといった経験はありませんか？
高カロリー・高脂肪に傾きがちな食生活、運動不足、減ることのない仕事のストレスなど生活習慣の変化によって、狭心症、心筋梗塞といった動脈硬化から生じる心臓の病気が増加の一途をたどっています。
狭心症は、動脈硬化によって心臓自身の筋肉に血液を供給するための冠動脈が狭くなつて生じる病気です。（図1）ですから、心臓に負担がかかったときに、心臓自身の筋肉への血液供給が悪くなり、前胸部の痛

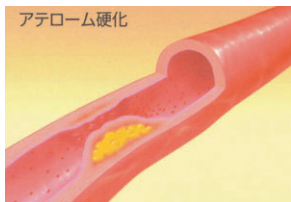


図1：冠動脈の狭窄

みや圧迫感が出現します。ですが、必ずしも前胸部とは限りません。左肩・背中・首などが痛んでくる場合もありますし、痛みははっきりせず、冷汗と気分不良だけの場合もあります。
診断法は、運動の前後での心電図の変化を調べる運動負荷心電図、アイソトープを用いて心臓の筋肉への血液の分布を調べる心筋シンチグラフィ、腕や足の血管からカテーテル（細い管）を挿入し、冠動脈のどこが狭くなっているかを明らかにする冠動脈造影などが必要に応じて行います。当院では、診断のためのカテーテル検査は、他の検査とも組み合わせ、2泊3日程の短期入院にて、手首の動脈から行っており、検査後の安静はほとんど不要です。治療方法は薬物治療、バルーンカテーテルやステント（金属のメッシュ）による治療、バイパス手術の三つが基本になり、病変の程度に応じてこれらの治療法を組み合わせるいは使い分けられます。バルーンカテーテルやステントによる冠動脈治療は私たちの最も得意とするところであり、血管内超音波検査（IVUS）を組み合わせ、最適でかつ安全な治療を提供しております。

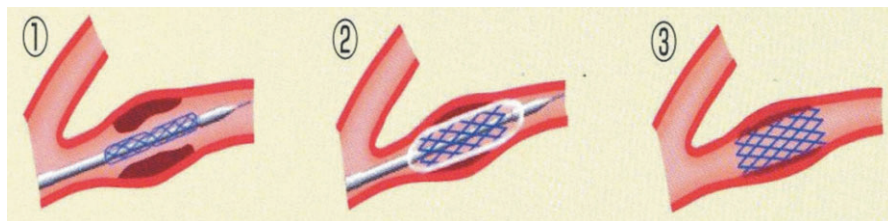


図2：冠動脈 ステント治療

★スタッフ（医師）



左から大島医師・高岡医師・村田医師・黒田医師

（表）治療実績

心臓カテーテル検査	321 例
カテーテルによる冠動脈治療	122 例
心筋シンチグラフィ検査	206 例
心エコー図検査	1016 例
急性心筋梗塞症	65 例
・胸痛の発症～来院までの時間：平均 1 時間 12 分 ・来院～心臓カテーテル検査開始までの時間：平均 28 分 このうち、2 例はヘリコプター搬送で救命	

（2003 年 8 月開院から 2004 年 7 月までのデータ）

★治療実績

実践救護訓練

神戸赤十字病院には、災害に備えて常備救護班の5班に加え、ERU班が2班組織されています。救護班には医師1名、看護師長1名、看護師2名、主事2名がいます。ERUというのは、災害時に小手術ができる程度の設備を整えた9m四方のエアテントです。9月18日に、兵庫県支部の主催で兵庫県下の4つの赤十字病院と血液センターから総勢81名が参加して、実践救護訓練が行われました。午前中、トリアージという傷病者を重症度別に振り分ける為の講義と、衛生ファックスの取扱方法の説明がありました。午後は実際にERUや重症・中等症・軽症テントを設置して、患者役を交代で務め、実践しながらの訓練が行われました。

いざという時に赤十字としての役割を果たしたいと思います。



救護員指導者 天野智子

お薬 四方山話

『インフルエンザワクチンとは』

薬剤部 薬剤情報係長 安達 秀樹

3



今年もインフルエンザの季節がやって来りました。インフルエンザによる健康被害を防ぐ方法のひとつにインフルエンザワクチンの接種があります。ワクチンはインフルエンザの流行を抑え、発症率を低下させます。感染した場合でもワクチンを接種していれば、症状も軽くて済むことが多いです。

インフルエンザはA型（香港型、ソ連型など）とB型などがあります。ワクチンにはこれらのウイルス株に対して、WHOの推奨に基づいて国の流行の型を予測して作られています。この約10年間、予測したウイルスと流行したウイルスの株はほぼ一致しており、有効なワクチンが作られています。ただ、ワクチンは風邪やSARSには効果がありません。ワクチンの主な副反応は

接種部位の腫れ、発赤、痛み、全身症状として発熱・悪寒・頭痛・倦怠感・嘔吐などですが通常2〜3日で消失します。

ワクチン接種から抗体獲得まで2週間位かかり効果の持続は接種後約5ヶ月と言われているので、流行シーズンの前に接種するのがお勧めです。また、インフルエンザ流行中は人ごみを避け、うがいや手洗いなど日常衛生に気を配ることも大切な予防のひとつです。もし運悪くインフルエンザに罹った場合、インフルエンザに罹ったばならない解熱剤がありますので、自己判断で勝手に使用せず、かかりつけの医師、薬剤師によく相談して下さい。



秋刀魚

1人当たり 231kcal
タンパク質 13.4g 鉄 1.1g
脂質 17.3g ビタミンE 12.4mg



材料 (1人分)

サンマ 一尾 レモン 10g
塩 0.5g 醤油 2g 大根 40g

●作り方

サンマに上の方から、振り塩する。塩干物には塩をしないこと。
網を油でふき、よくから焼きしてからサンマを乗せる。このようにすると、魚の皮や肉の表面が網につかないで、きれいに焼き上がる。
強火の遠火にするために、ガス器具の両側にレンガなどを置いて、火との距離を調節し強火で焼く。煙が出た時は、ウチワであおぐ。表を7割、裏返して3割の焼き加減で、上手に焦げ目をつける。何度もひっくり返すと身崩れを起こす。
頭を左にして皿に置き、大根おろし・レモンを添えて醤油で食べる。
魚を焼くには火加減が大切で、強火の遠火で炎を立てずと言われていて、難しいものです。

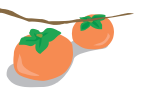
秋といえば、食欲の秋を一番に思い浮かべる方は多いと思います。自然界に生きる動物達は、食べる物がなくなる冬に備えて盛んに食べます。熊は冬眠中に産卵も授乳も済ませるため、旺盛な食欲にはつきりした目的があります。ところが、目的不明の人間にとっても、食欲の秋は肥満を気にする季節にもなりかねません。いつも食べ物にありつけるわけではない動物にとっても、餓えていても脳にブドウ糖を絶やさない仕組みは驚くほど発達していますが、食べ過ぎを処理する仕組みはお粗末で、脂肪が沈着し肥満となります。中国医学では肥満を陽気不足、つまり、エネルギー代謝の低下と見なしますから、肥満が若者に少なく中高年以降に多い理由がわかります。

秋が旬のサンマは、9〜10月が水揚げは最高ですが、脂が乗って美味なのは10〜11月です。栄養価の高い魚で、牛肉に比べてビタミンAが3倍、カルシウム4倍、脂肪1.5倍、蛋白質も豊富で、血合にはB2が多く含まれ、貧血症には大変効果のある魚です。背が青紫で、身がしつかりと光沢があり、尾ビレの黄色のものが良い品。脂の乗った旬のサンマは塩焼きで味わうのが最上です。強火の遠火で焼き、煙がサンマにつかないようにあおって焼くのがコツ。

栄養課だより

③

栄養課長 福井俊弘



地域住民向け研修会

H A T 健康セミナー 報告

脳神経外科部長 細田 弘吉

2004年8月4日、当院研修室にて第4回 HAT健康セミナーが開催されました。今回のテーマは脳卒中であり、脳神経外科から細田弘吉、神経内科から米田行宏、理学療法士から高橋研二、栄養士から福井俊弘が、それぞれテーマを決めて講演を行いました。当日の出席者は61名で、お忙しい中多数の御参加を感謝申し上げます。皆様方の脳卒中に対する関心の高さを物語るものと考えております。

脳卒中は日本人の3大死因の一つであり、全死因の16%を占めます。また、寝たきりになる原因のトップも脳卒中であり、40%を占めます。超高齢化社会を迎えようとする現在、健やかな老後をおくるためにもその予防と治療はきわめて重大です。脳卒中は①脳梗塞②脳内出血③くも膜下出血の大きく3つに分けられます。いずれの疾患においても発病してから出来るだけ早いうちに適切な治療を受けることが結果を左右します。激しい頭痛がする、手足が動かない、言葉がしゃべりにくい、意識がないなどの症状が出現したら即座に専門病院を受診して下さい。

当院の脳神経外科4名と神経内科2名は全員が専門医であり、そのうち3名は脳卒中学会専門医の資格も有しており、24時間365日無休で救急受け入れ体制をとっております。また、隣接する兵庫県災害医療センターと連携し生命の危機に瀕したような方もお受けすることが出来ます。脳卒中を疑われた場合や心配な時は、是非、脳神経外科または神経内科の受診をお勧めいたします。



基本方針

1. 患者さまを中心として、人権と意思を尊重し、安心と満足が得られる医療を提供いたします。
2. 地域医療機関との連携を保ち、患者さまに一貫した医療を提供いたします。
3. 救急医療、災害救護活動、国際救援活動を行います。
4. 内外の医療従事者の育成に努めます。
5. わたしたちは、日々研修・研鑽に、明るく活力のある職場づくりに努めます。

患者の権利に関する宣言

神戸赤十字病院は、医療の中心は患者さまであり、医療行為が患者さまと医療関係者との信頼関係の上に成り立つものであることを深く認識し、ここに、「患者の権利に関する宣言」を制定いたします。

当院の全職員は、この、「患者の権利に関する宣言」を守り、患者さまの医療に対する主体的な参加を支援して参ります。

1. 個人の尊重

個人として、その人格・価値観などが尊重されます。

2. 最善の医療を平等に受ける権利

最善の医療を平等に受ける権利があります。

3. 知る権利

自分が受けている医療について知る権利があります。

4. インフォームド・コンセント

自分が受ける検査や治療の内容や危険性、他の方法の有無などについて、十分に理解できるまで説明を受ける権利があります。

5. 自己決定権

十分な説明と情報提供をうけたうえで、自己の自由な意思に基づいて、治療方法を選択したり医療行為を拒否する権利があります。

6. プライバシーの権利

自分の情報を承認なしに第三者に開示されない権利があります。



ERU(緊急仮設診療所)内をご視察される秋篠宮妃殿下

トピックス&ニュース

秋篠宮妃殿下 ご視察



当院にて

去る9月22日、日本赤十字社名誉副総裁秋篠宮妃殿下に当院をご視察戴きました。兵庫県赤十字大会にご臨席の後で時間が限られていたため、兵庫県災害医療センターの救急部、※ERUなど、主として災害医療関係のご視察にとどまりました。

ロビーでは職員、患者様たちと共に迎え、妃殿下はにこやかにやさしくお声を掛けて戴き、一同が感激致しました。当院の施設概要についてご説明申し上げたところ、「明るい施設で、みなさんも明るく、よく活動しておられますね」というお言葉を戴きました。

※ERUとは、「災害対応ユニット」被災地設置型仮設診療所」のことです。神戸赤十字病院は、災害発生時にはERUを展開させ、被災者の救護活動に全力をあげます。

地域医療従事者向け公開研修会

「HATメディカルセミナー」 「なぎさモーニングレクチャー」

をオープンしました

このたび、開院後1年あまり院内で行ってまいりました、「HATメディカルセミナー」と「なぎさモーニングレクチャー」(主催：学術図書委員会)を、地域の医療従事者の方にもご参加していただき、地域医療の向上のために一緒に自己研鑽を積みみたいとオープンにいたしました。



熱心に聴講する地域の医療従事者

11月12日、13日の両日は、第14回HATメディカルセミナー「褥瘡のラップ療法について(講師：鳥谷部俊一先生)」が開催され、2日間で約350名(92施設)にご参加いただき、大変盛況でした。

「なぎさモーニングレクチャー」は、毎週水曜日の早朝7時50分から8時30分まで、講師は兵庫県災害医療センターと神戸赤十字病院の医師が行っております。



なぎさモーニングレクチャー

医師のみならず、看護師、コメディカル、事務職員など、毎回60名ぐらゐの参加者が職種を越えて一緒に勉強しております。

今後の予定や詳細については、当院のホームページでご案内しております。また、お問い合わせやお申し込みは、地域医療連携室(TEL:078-241-9261)までお願いいたします。

たくさんの方々の参加をお待ちしております。